

## 本音が聞けた

安東 謙

どういうわけか、大平先生は私を「アンちゃん」と呼んだ。そう呼ばれるようになったのは、昭和四十七年のある夜の出来事からのように思う。サシで会った時に「総裁公選の立候補を辞退し、第一回投票から田中支持に回ることを考えていますか」とぶつめた。みるみる大平先生の顔が真っ赤になり、細い目がカッと見開かれた。噛みつくような口調で「そんなこと、考えてないッ!」。そこで「先生が最下位だったら傷がつくという見方がある」と迫ると、大声で怒鳴り始めた。「いいか、アンちゃん。派閥というものはだなア、一人の人間とその人を支持する人間との一対一の人間的な結びつきなんだ。その結びつきは闘いの中でつくられるんだ。闘わない派閥など存在しない。オレは下りることも、最下位になることもないッ!」。さらに「そのことは田中さんと話についているんですね」と追いつちをかけると「進退問天、栄辱従命だ」。「えッ。どういう意味です?」。「天に問うとは、自分で決めるといふことだ。命に従うとは、後世の歴史家にまかせるといふ意味だ。進退をヒトに相談して決めることはしない。オレが自分で決めるッ!」。大変な意気込みだった。

初めて立ったこの総裁公選で、百一票と善戦したことが、総理・総裁への足がかりとなった。

田中政権での大平外相当時、金大中事件が起った。日韓関係が険悪化した最中、私は大平外相の紹介状をもつて密かにソウルに向かった。当時の韓国外相をはじめとする政府要人や金大中氏自身にも会い、取材すると同時に大平外相への伝言も託された。この伝言を伝えたと激論となってしまうた。私が日韓問題でこつすべきた、

と主張したのだ。耳を傾けていると思ったら、突然、「何も知らないで何を言うんだ」と怒鳴り始めた。反論すると、プイと立って奥に行ってしまった。

三木政権の後半、私は自民党キャップとして、福田政権誕生の政変を担当した。この際の大福話合いの自身は今もって正確なところがわからない。「二年交代」の密約が存在したことは確かだ。この時、自民党は総裁の任期を三年から二年に変えている。「証人」という人からも話は聞いたが、いずれにしろ密約がしこりになって、後まで尾を引いた。「政権禅譲」の話は壊れて、初の総裁予備選で大平政権は誕生した。「私議」の道はとらず、ルールに従ったことは、政党政治のうえから当然の選択であつたと思う。

大平政権の一年七カ月の間、私は官邸キャップ、四十日抗争の担当デスク、そして米国、メキシコ、カナダ、ユーゴ、西独の五カ国歴訪の同行記者団長として、度々つきあつた。大平先生が首相に就任した直後に「来年は総選挙ですね。九月早々ですか」と聞くと、意外にはつきりと「そうだ」という。鈴木善幸邸に回り確かめると「総選挙は再来年七月の参院選挙と同時によい」と別の意見。『大平ワンマン』が断言した「九月解散」を書いたら、やがて政局はそのように動いた。ある時、「田中、三木、福田政権には、いろいろと協力した。彼らがオレに協力するのは当然ではないか」と不満をぶちまけたこともあつた。さらに「田中はオレを先に総理にしようとけばよかつたんだ」ともつぶやいた。個人的には人間臭い人だつたが、公人としては熟慮断行型だつた。

大平先生は「西郷隆盛が好きだ」と私に語つたことがあつた。坂本竜馬は西郷を「少しはたけば少し響き、大きくたれば大きく響く」と評した。大平先生も大きくたれば、大きく響く人だつた。私は無茶突きしたので、高い音が返つてきたこともあつたが、それで本音が聞けた時もあった。長生きしてもらつて、音色を聞きに通いたい人であつた。

(毎日新聞政治部副部長)